

魔法の宿題 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名:大嶺美沙 所属:沖縄県立島尻特別支援学校

記録日:2016年2月19日

キーワード: 知的障がいを伴う自閉症、コミュニケーション、発語

【対象児の情報】

- ・学年 小学部6年(12歳)
- ・障害名 精神遅滞を伴う自閉性障害
- ・障害と困難の内容
 - 知的障がいを伴う自閉症

小学校3年生まで発語なし。

【活動目的】

- ・当初のねらい(計画書の学習目標)と活動による方向性の確認状況
 - ①理解言語を増やすことができる。
 - ②「伝える」手段を獲得し、「伝える・伝わる」楽しさを味わうことができる。
- ・実施期間:2015年5月~2016年3月
- ・実施者:大嶺美沙
- ・実施者と対象児の関係:学級担任

【活動内容と対象児の変化】

(ア)対象児の事前の状況

①児童のできること

〈基本的な生活習慣〉

- ・着脱、食事、排泄面ではほぼ自立している。
- ・日常の学校内のことであれば、周囲の動きを見たりし、落ち着いて行動することができる。

〈文字と音〉

- ・「ぎゅうにゅう」など、毎日見る文字に関しては、形で覚えており、声に出して読むことができる。
- ・教師の音の復唱を促すと、真似して発音することができる。(不明瞭な音もある)

〈コミュニケーション〉

- ・言葉(単語)や身振り、文字、イラスト等で意思表示をしようとする。

②児童の困っていること

〈文字と音〉

- ・平仮名を見て、書き映すことができるが、形で覚えている単語(例:ぎゅうにゅう等)以外を読むことが困難。平仮名をひとつずつ読むことは困難。

〈コミュニケーション〉

- ・何度も同じことを言い続けたり、伝えているけれども、受け取り手が理解できない時があり、伝わらない時、怒ったり、泣きだしたりする。
- ・自分が伝えたい事を整理したり、発語することが困難であるが、他の児童が自分で発表したりする姿を見て、自分もそのようにしたいという意欲が高い。前に出て発表を試みるものの、言いたいことが整理できていない(例:「朝ごはんメニュー」の発表では、今朝自分が何を食べたのかを整理して発語することが困難。)「朝ごはんメニュー」を取り入れた昨年度当初は、保護者に朝ごはんメニューを連絡帳に書いても

らい、発表の際は教師の後について発表するスタイルをとっていた。しかし、教師の後について言うことに対して「しー、しずかにして（先生言わないで）」と嫌がり、模倣言語をきちんと聞かずに、あいまいな言葉を発表しており、それが伝わらなかったときに怒りだしたりする時があった。発表したいけど、うまく発音できず伝わらず、困っている時があるが、教師が模倣を示そうとすると、「それはイヤ」な様子で、音声を聞こうとしなかった。耳からのインプットが必要な時期だと考えるが、それを教師や大人がやるとイヤで、「自分でやりたい」という気持ちが強い。

(イ)その活動の具体的内容

(1) 「理解言語を増やすことができる」ことに関して

児童は、小学3年生まで発語がなく、「パパ」「ママ」という言葉から発語し始め、現在は「プール」「遊び」など、自分の興味のある言葉から覚えて発語することができるようになってきている。今後の発語を促すために、インプットの量を増やし、児童の耳を慣れさせ、自発的な発語に促すことが必要だと考えた。これまでは、教師の発語を聞いたりしていたが、インプットの量を増やすために iPad を活用し、何度も聞き返すことができるようにした。

①Drop Talk を活用し、児童の興味がある食べ物から取り組んだ。

使用アプリ名：Drop Talk (図1)

実施した時間帯：毎日、朝の活動時間、朝の会 (9:00~10:00) 2015年6月~

毎朝、朝の会の「朝ごはんの発表」で、自分が今日、食べた朝ごはんを発表する。Drop Talk を活用し、朝食の写真を一品ずつアイコンにし、タップすると音声の流れ、それを聞いて児童は模倣し、発表する。(図2)

2015年9月から、給食メニューも同様に取り組んでいる。給食メニューは、昨年度から朝の活動の一つとして、毎朝試写する取り組みをしていたが、書くことができても読み上げが困難であった。アイコンをタップし音声が出る

ことで、何度でも繰り返し音声を確認することができるようになった。(図3)



図1：Drop Talk



図2：Drop Talk の画面。タップすると音声の流れ、児童はあとに続いて復唱する。

図3：試写した文字とアイコンを照らし合わせ音声を確認する様子。

②Keynote を活用し、朝の会の進行を一人で行う。

毎日行う「朝の会」では、これまで教師のモデルを聞いて、復唱することを行ってきっていたが、児童は自分一人でやりたいという思いが強く、教師がモデルを示すと嫌がっていた。しかし、一人で会の進行を試みても、発語がはっきりしない。また、児童自身何と言っているかわからない、ということで進行することが難しかった。Keynote で音声を録音し、プログラム順に沿ってタップし、音声が出たら復唱するという取り組みをした。

児童は、2、3回教師と一緒に操作方法を示すと、すぐに理解し、すぐに一人で朝の会を進行することができた。

(2) 『「伝える」手段を獲得し、「伝える・伝わる」楽しさを味わうことができる』に関して

カメラ機能(図4)を活用する練習をした。始めは重くて撮影することに慣れず画像がぶれ、見返す(図5)ことが無かったが、慣れてくると自分が好きなものや興味を持ったものを撮影するようになった。



図4：カメラ



図5：写真



図6：
好きな絵本の写真を撮る様子。

(ウ)対象児の事後の変化

(1) 「理解言語を増やすことができる」ことに関して

・ Drop Talk の活用

「写真」「文字」「音声」を一致させた習得を練習中である。朝の会での「朝ごはん」を発表する場面で、児童は毎朝自分の朝ごはんを写真に撮り、それを教師が一つずつシンボル化することで、児童が自分で発表できる環境をつくることができた。今まで、教師の後について言うことに対して「しー、しずかにして」と嫌がり、模倣言語をきちんと聞かずに、はっきりと発音できず、何と言っているのか分からない言葉で話しており、それが伝わらなかったときに怒りだしたりする時があった。Drop Talk を活用し、「音声を聞く」活動が増えたことで、児童の発語が徐々に明確になってきた。聞きとれるようになった単語が増えたことで、児童自信が「伝わる」実感を得ることができた。また、発語ができるようになった喜びは、理解言語の獲得も増やし、「スープ」の単語は文字を見た時に、「すー」とスープを飲むしずさをすることができる等、文字を見て具体物をイメージできるようになってきている。

また、今の段階では、シンボルをタップし、音声を聞き、一部音声を真似て発声している状況なので、インプットを繰り返し、児童のアウトプットにつながるよう継続指導していきたい。今後は、食べ物のみならず、児童の好きなキャラクターや活動を取り入れて、理解言語の習得に努めたい。

(2) 『「伝える」手段を獲得し、「伝える・伝わる」楽しさを味わうことができる』に関して

・カメラ機能を活用し、撮影した画像を、後に自分で見返してニコニコしたり、他の人に見せて満足そうにしている様子が見られた。毎朝、今朝の朝ごはんメニューを写真に撮り、登校してすぐに担任に見せる。「何食べたの?」と尋ねると、「パン、食べた」と二語文で伝えることができるようになった。そこで、教師がパンに指をさし、「パン、食べたんだね。」「おいしかった?」と尋ねると、「おいしかった(不明瞭)」で答え、嬉しそうにしていた。画像を指差し、児童が誤った表現をした時には(例えば、お茶漬けを指差し、「パン食べた」と言った時等)、正しい画像と音声(「お茶漬け食べたんだね」)と一緒に確認した。特に、児童が自発的に表現した画像については、すぐにシンボル化し、何度も聞き返すことができるようにした。

児童の誕生日の次の日には、ケーキと一緒に写っている写真などを見せ、「ケーキ食べた」などの表現もできた。「ケーキ食べた」「海行った」等、二語文がとても上手に表現できるようになってきている。

iPadを「伝える」手段として活用出来つつあるが、未だに指差しのみで表現し、意味が伝わらず、何度も同じ行為を繰り返すことがあるので、場面に応じ、今後も活用の幅を広げられそうだ。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

(1) iPadは児童の大好きが詰まった宝物

「写真」アプリで自分の好きな物を写真に撮っておさめる活動は、好きな物をいつでも振り返られるし、写真を見せることで「伝えたい」を一人で実現できる存在になり、児童の想いを現実にできた。

(2) 聞き取れる発語の増加

児童の好きな物などを中心にシンボルを作成し、「聞く」活動を増やすことが、聞き取れる発語の習得につながった。

・エビデンス(具体的数値など)

- (1) 自分の好きな物を写真に撮って見せる活動は、児童の「伝えたい」気持ちを実現することができた。iPadを活用するようになって、何かを伝えたいけど伝わらなくて泣くということは見られなくなった。
- (2) iPad 活用前は、人が言うのを模倣するよう言うと拒否反応を示していたが、iPad では最後まで聞くことができた。新しく言えるようになった単語は、iPad を持って画像を映しだし、何度も言う様子が見られた。
- (3) 児童がケーキと一緒に写っている写真を見せながら「ケーキ」と言ってきたタイミングで、教師は「ケーキ食べたんだね」というやりとりをしているうちに、自ら「ケーキ食べた」と二語文で言うことができた。iPad を活用し、「聞く」活動に慣れたことで、児童の言葉に対する興味は更に深まり、普通のやりとりにも耳を傾けることができるようになった。その結果、二語文習得へ至ったのではないだろうか。「言う」ために「聞く」という意識が高まってきている。

・その他エピソード(画像などを含めて)

「せんせ」と読んで指差し、ということが日常的に見られ、児童は心の中で伝えたいことを多く持っているのだと感じていた。クラスの友だちは発語が上手で、みんな一人で発表しているのを見て、先生の手助けを嫌がり、自分も一人で発表したいと、強く思っているのを感じていた。iPad を活用し、伝えたいことを画面に出し、「一人で伝えることができた」という満足は、児童の中でとても大きな事であった。iPad から流れる音声を聞くという活動は、今まで教師の手本を嫌がっていた彼女にとって、絶好のインプットの場となった。インプットが増えたことで、自然と発語が明瞭になりアウトプットにつなげることができた。

来年度、中学部に進学するが、家庭でも児童のコミュニケーション手段の一つとしてタブレット端末を継続して使用していきたいということであった。学校でも、中学部への引き継ぎをしっかりと行い、彼女のコミュニケーション手段の拡大等への活用を継続していく予定である。

聞き取れる発語

4月	12月までに増加した発語	
パパ	しずかにして	パン
ママ	ありがとうございます	スープ
びーちゃん(弟)	いました	チャンブル
はっち(近所の子)	いく	さかな
せんせ(先生)	アンパンマン	ラーメン
おはようございます	(学級の先生の	りんごゼリー
さようなら	名前)	バナナ
ケーキ	はしりたい	みかん
うみ	はした	(ヨーグルト)
ブル	ブルいった	(すましじる)
きれい	うみいった	(ハンバーグ)
おはな	ケーキ食べた	
まって	はじめます	○は曖昧
わかった	(おわります)	
はい	れい	
さわった	(おねがいします)	
クラスメートの名前		
ぎゅうにゅう		
ごはん		
19	+19(6)	

